

フォト通信

◆左上から、第52回丸子早起野球大会開幕式で、私が入っている丸子メッツチーム。陣場台地でのぶどう苗木の補植作業開会式。腰越地区深山の古民コンサート（藤原宅）。

◆中段左から、国際交流フェスティバル（丸子文化会館）小林さんの銅板工作など多彩な催し。信州国際音楽村では、依田保育園児によるオープニングと日本・ハンガリー外交関係開設150周年記念事業でハンガリー大使館の方と音楽村少年少女合唱団とのプレゼント交換。

◆下段左から、第44回長瀬中央自治会ふれあい球技大会。わが家の田植え作業。西内小学校第124回運動会。全校児童（32人）で組体操。



～上田をもっと好きになる～

「信州上田学（楽）～住みたい理由を言えるまちを創る～として、藻谷浩介（もたにこうすけ）氏：株式会社日本総合研究所主席研究員／株式会社日本政策投資銀行地域企画部特任顧問が講演した。藻谷氏は、著書「里山資本主義」が有名です。講演は、クイズ方式で参加者から回答を求めるような方法も取り入れたもので、上田市民が上田地域のことをどれだけ知識があるかといったものでした。私もだいたいはわかりましたが、外れたこともありました。藻谷氏は、平成の合併前の約3200の市町村と106カ国に訪れたとのことで、文字通り広い経験と知識がある方で、勉強になりました。

◆第二部はパネルディスカッション

パネリストは、藻谷浩介氏（株式会社日本総合研究所主席研究員／長野大学客員教授）、市川正夫氏（長野大学環境ツーリズム学部特任教授）、小岩井彰氏（長野大学社会福祉学部特任教授／地球クラブまめっこ主催）、小林一郎氏（農業生産法人株式会社信州せいしゅん村むらおさ）、間藤まりの氏（ミリグラム株式会社取締役・真田ゆめぐるproject）、土屋陽一氏（上田市長）コーディネーターは、松下重雄氏（長野大学地域づくり総合センター長）からさまざまな取り組みの紹介がありました。

■基調講演前に、古田睦美氏（環境ツーリズム教授）から公立大学法人化した長野大学では①信州上田学を中期計画に入れた。②上田地域には、豊富な資源がある③社会が求める学力観が変化している④生涯学び続ける能力などについて、「地域学」への取り組みについて報告がありました。長野大学の取り組みにも注目したいものです。

～私は、藻谷氏の講演やパネルディスカッションの内容も勉強になりましたが、何よりも長野大学が「知の拠点」として、継続して研究していくことに期待したいと思います。～

ハンガリー（一口メモ）



名刺交換の際にお聞きした範囲ですが、人口は約1000万人、面積は北海道ぐらい。世界的でも有数の温泉大国で首都のブダペストだけでも100を超す源泉と50近くの浴場があるとのこと。水着着用で男女一緒だそうです。ハンガリー語はかなりむづかしい。ハンガリー産の羽毛を使用した羽毛布団などが日本ではなじみのあるものとのことでした。

主人公は80歳と76歳の老兄弟。とくに事件があるわけではなく、ごく日常に思づく話を人間味ゆたかに描いた家族ドラマだ。100歳の父の葬式を終え家業の鉄工所で仕事にとりかかった76歳の鉄男（高橋長英）。突然、40年前家を出た80歳の兄金之助（柳澤慎一）が娘とともに帰国して来た。金之助の過去や樹里の素性が明らかになっていく。気の向くままに生きてきた風来坊の兄。その「どっさり」を受け父の介護や借金返済に苦勞し今も独身の真直な弟。対照的な2人の確執と愛憎、絆。

老兄弟の確執と愛憎、絆

映画

「兄消える」

（日本）



金之助（柳澤慎一＝左）と鉄男（高橋長英） ©「兄消える」製作委員会

お年寄りの姿が目立つ商店街の店主や幼なじみを金内喜久夫、坂口秀貞、原康義、新橋耐子ら劇団文学座の面々が手堅く演じた。失われつつある人と人の温かくなつたが、再生の希望が託されている。監督は初めてメガホンに挑んだ文学座手だれの演出家・西川信廣。（うすいすみえ・映画ライター）

人の確執と愛憎、一瞬にして睦む絆がほろ苦い笑いとともしんみりさせる。欠点があろうと憎めない人物を軽妙に演じた柳澤慎一、磨きのかかった堅実な演技をみせる高橋長英が見事だ。孤独、古い、寂しさが見え隠れする中で「人生で無駄なことなどないんだよ」という金之助のセリフが胸に染みる。映画は、老いてもそれなりに健やかであれ、老人に『嘆きのセレナーデ』は似合わない、と高齢者を励ましているようだ。